

機関番号：12501
 研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19320080
 研究課題名（和文） 異文化理解を目指した英語聴解力養成用 CALL 教材の開発
 研究課題名（英文） Development of a CALL System for Cultural Understanding
 研究代表者 高橋 秀夫（TAKAHASHI HIDEO）
 千葉大学・言語教育センター・教授
 研究者番号： 30226873

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は英語コミュニケーション能力の基礎力とされる聴解力を異文化理解と融合させて指導する英語教材を開発することである。具体的にはオーストラリア、イギリス、カナダで独自にビデオ収録を行い、それぞれの国の文化、歴史、自然、日常生活について英語を通して学ぶ、3ラウンド・システムによる Online 型 CALL 教材を開発した。開発された3種の CALL 教材は授業での試用の結果、聴解力の向上の面で他の教材とほぼ同様の効果があるとともに、学習者の異文化に対する興味喚起の効果が高いことが確認された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of the present study is to develop CALL materials to improve Japanese college learners' English skills as well as to help them understand various cultures in English speaking countries other than the US. The filming was done in Australia, England, and Canada and three sets of online CALL materials based on problem-solving tasks using the Three-Step Auditory Comprehension Approach were developed. The experimental use of the materials in the classroom showed that they can be effectively used for both improving learners' listening skills and motivating them to learn about different cultures.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
20年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
21年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
22年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
総計	15,100,000	4,530,000	19,630,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育，異文化理解，コミュニケーション，CALL，マルチメディア

1. 研究開始当初の背景

英語の習得には四技能（読む、書く、聞く、話す）のバランスよい学習が必要であることは言うまでもないが、とりわけ基礎力として十分な語彙力の育成とともに聴解力の効果的養成が不可欠である。また、円滑なコミュニケーションの実践には四技能に加え、当該

言語が使用される国、地域の生活、習慣等に関する文化的知識が不可欠である。千葉大学ではこれまでにアメリカ英語、文化を扱った教材を開発してきたが、他の英語国の文化を扱った教材を開発し、バランスの取れた教材構成とする必要があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は英語コミュニケーション能力育成において基礎力として重要視されている聴解力を異文化理解と融合させて指導する CALL 教材を開発することである。具体的にはこれまでのアメリカ英語を扱って開発した教材に加え、オーストラリア、イギリス、カナダの文化、生活を扱った教材を3種開発し、より包括的な教材群を学習者に提供できるようにすることである。

3. 研究の方法

3つの国の代表的文化、習慣を紹介する教材を開発するため、それぞれの教材で扱うべきトピックの選定は、協定校オーストラリア・モナシュ大学、千葉大学イギリス人英語教員、カナダ人英語教員と共同で行った。各教材のメインテーマは「オーストラリアのユニークな文化」「イギリスの歴史」「カナダの自然」としたが、メインテーマ以外にも各国の特徴を示し、かつ学習者が興味を持つような内容をできるだけ多く含めるよう努めた。

ビデオの撮影はオーストラリア（メルボルン、ビクトリア州）、イギリス（ロンドン、バース、エクセター）、カナダ（エドモントン、バンフ、ジャスパー・アルバータ州）で行い、現地の人々による文化、生活の紹介、現地の人々に対するインタビュー、現地の人々の対話を中心に収録した。帰国後収録されたビデオは1トピックごとに約1分30秒のビデオクリップに編集された。

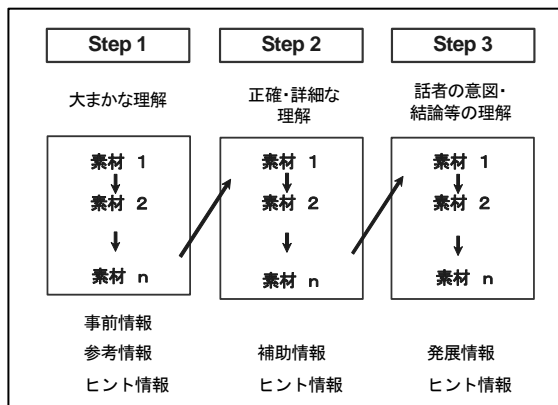


図1 ミラウンド・システムの構造(竹蓋, 1997)

編集されたビデオをもとにスクリプトを作成し、千葉大学で開発された「ミラウンド・システム」と呼ばれる指導理論に従って、コースウェア化した。ミラウンド・システムではひとつの素材を一度の学習で終了させず、タスクの難易度を少しずつ上げて3回のStepにわけて学習させる。各Stepの学習目標はStep 1が話題、トピックの推測などの大まかな理解、Step 2が言われていることの詳細な理解、そしてStep 3が発話の意図、結論

等の理解で、徐々に難易度の高いタスクを与える。また学習の順番も、ひとつの素材を続けて学習するのではなく、Stepごとに4つから5つの素材を通して学習する形態を取り、ひとつの素材を結果的に断続的に3回に分けて学習するという特徴を持つ(図1)。

4. 研究成果

開発された教材は Gateway to Australia, A Bit of Britain, Canadian Ways の3種である。各教材のユニット構成と画面例を表1、図2~4に示した。

表1 各教材のユニット構成

Gateway to Australia	
Unit 1	Welcome to Melbourne
Unit 2	Facts about Australia
Unit 3	Monash University
Unit 4	Aussie Way
A Bit of Britain	
Unit 1	Welcome to London
Unit 2	Historical Sights
Unit 3	English Countryside
Unit 4	Working People
Canadian Ways	
Unit 1	Nature
Unit 2	History
Unit 3	Wildlife
Unit 4	Sports & Camping

図2はオーストラリア編教材の起動画面である。起動画面の作成には教材のトピックとなっているものの写真をできるだけ加え、意欲を持って学習に取り組めるよう興味深いものにするよう努めた。画面の制作は本学デザイン工学科学生に依頼した。

図3はイギリス編教材の学習画面例である。本研究で開発された教材では、学習者は画面上部に表示される課題に対して、静止画、辞書情報、そして頁を進めるごとに表示されるヒント情報を手がかりに、自分でビデオを操作して正解を見つけるという問題解決作業を行う。正解例は画面に表示され、正否は自己判断する形で学習を進める。さらに正解確認後、英文を見ながら再度英語を聞いて確認するとともに、文法の注意事項や文化的事柄、コミュニケーションの技術に関する解説を読んで学習を深める。現在国内の大学で使用されている英語 CALL 教材には4択、空所補充といった形式に特化しているものが多いが、それはテストで「どれだけできるようになったか評価をするプロセス」である。学習とは「できなかったことをできるようにする過程」であり、その指導の過程を行うのが我々の CALL システムの最大の特徴であると言える。



図2 Gateway to Australia 起動画面

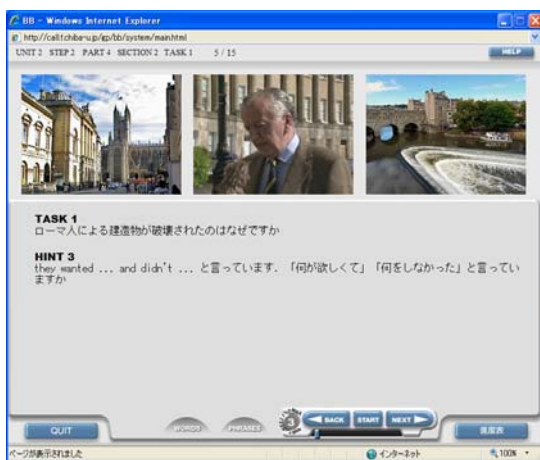


図3 A Bit of Britain 学習画面



図4 Canadian Ways コラム画面

図4は学習の途中においたコラム記事画面である。ビデオ取材はしたが総学習時間の関係で割愛した内容や収録できなかったが各国の文化、ユニークな習慣を端的に示すことがらを写真、ビデオとともに短い記事でまとめた画面で、動機づけの効果を考慮し、学習休憩時に異文化を楽しめるよう配置した

ものである。

開発された教材はオンラインでもオフラインでも利用可能である。2008年度後期より教材が開発されるごとに、逐次授業で試用を行い、学習者から教材に対する意見聴取を行った。教材に対する学習者の5段階評価による評価結果は表2に示したが、教材の内容に興味を持ち、学習を楽しみと感じ、別の教材でも学習したい、授業を取ってよかったと評価されていることがわかる。また自由筆記による意見聴取からは「英語の知識だけでなくその国の文化や歴史が学べた」「アメリカ英語との違いを実感できた」「その国について知るのが楽しくなって自習回数が増えた」「旅行ガイドのテレビを見ているようで楽しかった」「是非この国に行ってみよう」「写真がきれいで飽きずに勉強できた」「コラムによるまめ知識が楽しかった」などの意見が聞かれ、学習者にオーストラリア、イギリス、カナダの文化への興味を喚起させることができたと判断した。

表2 教材に対する学習者の評価

	はい	いいえ
内容に興味を持った	●	
他教材より面白い		●
写真は励みになる	●	
コラムは面白い		●
各種情報は役立った		●
徐々に聞けるようになった	●	
聞き取り力がついた		●
学習は楽しかった	●	
別教材でも学習したい		●
授業を取ってよかった	●	

また TOEIC による得点上昇による教育効果測定では、教材ごとに多少の差はあるものの、これまで効果を上げてきた千葉大学開発の CALL 教材と同等の効果を上げられることが観察された。これらの結果から聴解力養成を異文化理解と融合させて指導する CALL 教材を開発するという目的は達成されたものを判断した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

①土肥充, 高橋秀夫, Lorene Pagcaliwagan, 竹蓋順子, 竹蓋幸生, 「映画DVD対応CALL教材支援システムの開発と試用」, 『e-Learning 教育研究』, 第3巻, 2008, pp. 9-18.

②高橋秀夫, 土肥充, 久保田正人, Lorene Pagcaliwagan, 桑原市郎, 荒巻英司, 小笠原春菜, 「統合型Online CALLシステム — その全体構想と中間報告」, 『言語文化論

叢』, 第3号, 2009, pp.61-76.

③桑原市郎, 高橋秀夫, 「三ラウンド・システムに基づいた高校生向け英語リスニングCALL教材の開発」, 『言語文化論叢』, 第4号, 2010, pp.33-44.

④高橋秀夫, 土肥充, 久保田正人, ロリーン・パカリワガン 「日本人大学生の英語力養成のための統合型Online CALLシステム」, 『ICT活用教育方法研究』, 第13巻, 第1号, 2010, pp.31-35.

⑤高橋秀夫, 塩澤達矢, 「千葉大学英語Online CALLシステムのマルチプラットフォーム化」, 『言語文化論叢』, 第5号, 2011, pp.43-55.

〔学会発表〕(計6件)

①高橋秀夫, 土肥充, Lorene Pagcaliwagan, 竹蓋順子, 竹蓋幸生, 「Web対応CALLソフトウェア開発支援システムとCALL教材の開発」, 外国語教育メディア学会, 2007.8.9, 名古屋学院大学.

②高橋秀夫, 土肥充, 久保田正人, L. Pagcaliwagan, 「統合型英語 Online CALLシステムの開発」, 外国語教育メディア学会, 2009.8.5, 流通科学大学

③桑原市郎, 高橋秀夫, 「三ラウンド・システムに基づいた高校生向け英語リスニングCALL教材の開発」, 外国語教育メディア学会, 2009.8.5, 流通科学大学.

④高橋秀夫, 塩澤達矢, 「千葉大学英語Online CALLシステムのマルチプラットフォーム化」, 外国語教育メディア学会 50周年記念全国研究大会, 2011.8.3, 横浜サイエンスフロンティア高等学校.

⑤土肥充, 高橋秀夫, 「動画共有サービス対応CALL教材作成支援システムの開発」, 外国語教育メディア学会 50周年記念全国研究大会, 2011.8.3, 横浜サイエンスフロンティア高等学校.

⑥高橋秀夫, 土肥充, 久保田正人, ロリーン・パカリワガン, 「統合型英語Online CALLシステム」, ICT利用による教育改善研究発表会, 2011.8.7 上智大学四谷キャンパス.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

英語 CALL システムのメニュー画面

<http://call.f.chiba-u.jp/gp/menu/>

Gateway to Australia アクセス画面

(別途 ID, PW が必要となります)

<http://call.f.chiba-u.jp/gp/au>

A Bit of Britain アクセス画面

(別途 ID, PW が必要となります)

<http://call.f.chiba-u.jp/gp/bb>

Canadian Ways アクセス画面

(別途 ID, PW が必要となります)

<http://call.f.chiba-u.jp/gp/cw>

6. 研究組織

(1)研究代表者

高橋 秀夫 (Takahashi, Hideo)

千葉大学・言語教育センター・教授

研究者番号: 30226873

(2)研究分担者

土肥 充 (Doi, Mitsuru)

千葉大学・言語教育センター・准教授

研究者番号: 00323428

Pagcaliwagan, Lorene

千葉大学・言語教育センター・准教授

研究者番号: 70400984

Morikawa, Sarah

千葉大学・言語教育センター・特別語学講師

研究者番号: 80506882

(3)連携研究者

竹蓋 幸生 (Takefuta, Yukio)

千葉大学・名誉教授

研究者番号: 40009030

竹蓋 順子 (Takefuta, Junko)

大阪大学・サイバーメディアセンター・准教授

研究者番号: 00352740